

# 自閉症児・者への治療教育と サポートシステムに関する一考察

——「わかすぎ自閉症キャンプ」の実践から——

木谷 秀勝

A Discussion of Therapeutic Treatment and  
Support System for Children and Adults with Autism  
—From The Practice of ‘Wakasugi Camp for Autism’

Hidekatsu KIYA

キーワード：自閉症、自閉症への療育キャンプ、サポートシステム

## 1. 目的

今年度で7回目を迎えた「わかすぎ自閉症キャンプ」（主催：わかすぎ自閉症キャンプ実行委員会、代表：木谷秀勝）は、さまざまな関係諸氏の支援の基に、一つの方向性を見出すことができている。

そこで、今回の報告では、「わかすぎ自閉症キャンプ」（以下「キャンプ」と略す）のこれまでの過程や現在の活動の理念・内容を振り返りながら、同時にその背景にある我々の自閉症児・者への治療教育とサポートシステムに関する考え方を明らかにしながら、このキャンプがもつ役割、そして今後必要の可能性について検討し、考察を進めることを目的とする。

## 2. 「わかすぎ自閉症キャンプ」のこれまでの流れ

このキャンプは、元々（財）朝日新聞西部厚生文化事業団が主催していた「朝日自閉症キャンプ（1969年より1989年まで）」（小林・村田，1977）の後半に療育スタッフとして参加したメンバーを中心として1994年に活動を始めたものである。

活動を始めた理由としては、「朝日自閉症キャンプ」で体験した自閉症児との情緒的な交流とそこから広がる自閉症児の可能性の世界を、我々自身でもう一度作り上げ、さらに次の世代にその体験を伝える必要性を強く感じ始めたためである。その結果、この考えに賛同する仲間達（精神科医、臨床心理士、教諭等）により「わかすぎ自閉症キャンプ実行委員会」が結成され、自閉症児・者とその関係者を対象とした療育キャンプを再スタートさせることができたのである。

キャンプの名称の由来は、第1回のキャンプを福岡県粕屋郡にある若杉山のキャンプ場で行ったことと、若杉のように自閉症児・者が真直ぐにすくすくと成長するようにという願いを込めてつけた名称である。

表1：第1回わかすぎ自閉症キャンププログラム

	1日目・7月27日 (THU)		2日目・7月28日 (FRI)		3日目・7月29日 (STA)		
	参加児・者	家族教室	参加児・者	家族教室	参加児・者	家族教室	
6:00			起床・朝の準備 朝の集い	起床	起床・朝の準備 朝の集い	起床	
7:00			朝食	朝食	朝食	朝食	
8:00			片付け 登山準備	学習会③	片付け	学習会④	
9:00			登山 (米ノ山)		集団レク 自由遊び&創作		
10:00					荷物整理		
11:00			閉会式		撤収開始 (スタッフ昼食)		
12:00					昼食		
13:00					グループ活動 (昼寝・水遊び等)		
14:00			受付・打ち合わせ 開会式				
15:00			グループ活動	学習会①			
16:00	自炊						
17:00	夕食						
18:00			夏祭り (夕食)				
19:00	片付け・入浴 グループ活動 自由時間						
20:00	集団レク (散策&肝だめし)	夕食					
21:00			学習会②				
22:00	就寝準備 就寝	就寝準備 就寝					
23:00							

その第1回目のキャンプのプログラムの詳細は表1に示したとおりであるが、その基本理念は、次の3点を中心とした（この基本理念は現在も変わっていない）。

(1) キャンプ生活を通して自閉症児・者の生活面、社会面での適応能力と余暇活動への関心を高める。

- ・ キャンプの対象は、幼児期から成人期までの自閉症児・者とする
- ・ プログラムでは、それぞれの年齢や能力に応じた体験ができるよう工夫する
- ・ 自閉症児・者一人一人が積極的に参加できるよう活動内容を広げる
- ・ 以上の点を効果的に進めるためにも、それぞれの自閉症児・者に対しては、一対一で担

当者をつけて、自閉症児・者の体験をサポートできるように配慮する

(2) 自閉症児・者をもつ家族や自閉症児・者と関わりをもつ多くの人達への援助を行う。

・自閉症児・者との体験を共有できるように、自閉症児・者への療育キャンプと並行して、兄弟児キャンプ、家族教室を実施する。

・家族教室では、自閉症児・者への理解と合わせて、それぞれの家族のもつ悩みや不安への具体的な対応ができるよう配慮する。

(3) さまざまな領域からのボランティアの参加を通して、自閉症への理解を深めてもらうことと自閉症児・者の療育を担う次の世代の育成をはかる。

この理念を打ち出した背景としては、第一に、キャンプの主人公は自閉症児・者自身であり、従来からの与えられたプログラムに沿って、時間に追われながらのキャンプを過ごす形式よりも、ゆっくりとした時間の枠の中で、自閉症児・者自身が少しでも主体的に取り組めるように工夫したプログラムとしたかったことがある。

第二に、自閉症児・者を日常援助している家族(兄弟児を含む)、あるいは学校の先生にも参加してもらい、自閉症児・者が抱えるさまざまな問題についてできるだけ時間をかけながら、具体的な対応について参加者が共有するように配慮したことである。

第三に、参加してもらおうボランティアも、学生・社会人・学校関係者・医療従事者等と幅広く募集し、自閉症児・者に関する正しい理解と啓蒙を図り、我々自身が朝日自閉症キャンプを通して体得した自閉症児・者への理解が現実の臨床現場で大いに有効であったように、次の世代にも同様な体験を伝達するという重要な場としたかったからである。

表 2 : 現代のわかすぎ自閉症キャンププログラム

	1 日 目		2 日 目		3 日 目		
	対象児・者	家族教室	対象児・者	家族教室	対象児・者	家族教室	
7:00			起床	起床	起床	起床	
8:00			朝食	朝食	朝食	朝食	
9:00			志賀島ワクワクツアー	学習会(2)	後片付け 大掃除	後片付け 移動	
10:00							
11:00	スタッフ集合、準備					閉会式	
12:00	昼食				昼食		
13:00				個別相談会			
14:00	最終打ち合わせ						
15:00	受け付け		入浴、休憩	移動			
16:00	開会式						
17:00			夏祭り				
18:00	入浴	移動					
19:00	夕食	夕食					
20:00	レク						
21:00		学習会(1)					
22:00	対象児・者: 就寝	自由時間	対象児・者: 就寝	入浴	懇親会		
23:00	スタッフ: 打ち合わせ		スタッフ: 打ち合わせ				
24:00							

しかしながら、こうした理念も、第1回目から順調にスタートしたわけではなく、理念と実際のプログラムの運営との間には、現実的なギャップも多く見られた。それでも、リピーターとして参加してくれる自閉症児・者の期待に答えるべく、キャンプの計画をさらに検討する過程で、第4回目のキャンプ（1997年）より、現代の場所（福岡市東区志賀島にある保養所及び国民宿舎）へと場所の変更を行った。それに伴うプログラムの変更も表2に示すように行った。

その結果、従来からの理念を具体化することがより可能となった。特に（1）志賀島という自然とさまざまなレクリエーション機関を活用すること。同時にその選択をできるだけ自閉症児・者自身に行ってもらふこと。（2）公共交通機関を活用すること。（3）家族教室は別の場所（車で5分の場所にある国民宿舎）で開くので、家族教室そのものの充実も図ること（詳細は後述）の3点をさらに充実させることができるようになり、今回のキャンプを迎えることとなった。

### 3. 今回のキャンプの組織・運営について

以上のようなキャンプの成立過程を踏まえ、今年度は次のような組織・運営とした。

#### （1）キャンプ全体の組織構成（図1参照）

キャンプ長：キャンプ全体の責任者、同時に家族教室での講師

副キャンプ長：療育場面での責任者及び医療担当

事務局：全体の運営と会計

療育班チーフ：療育部門の統括責任者

療育スタッフ：療育部門の実働担当

グループリーダー：各グループの責任者及びアドバイザー

担当及びフリー：対象児・者及び兄弟児グループでの担当もしくはそのサポート的役割

家族教室：家族教室全体の運営と参加家族の相談役

医療班：副キャンプ長が兼任となるが、キャンプ中の健康管理とキャンプ後の医療的なケアについても専門的な立場での助言を行う

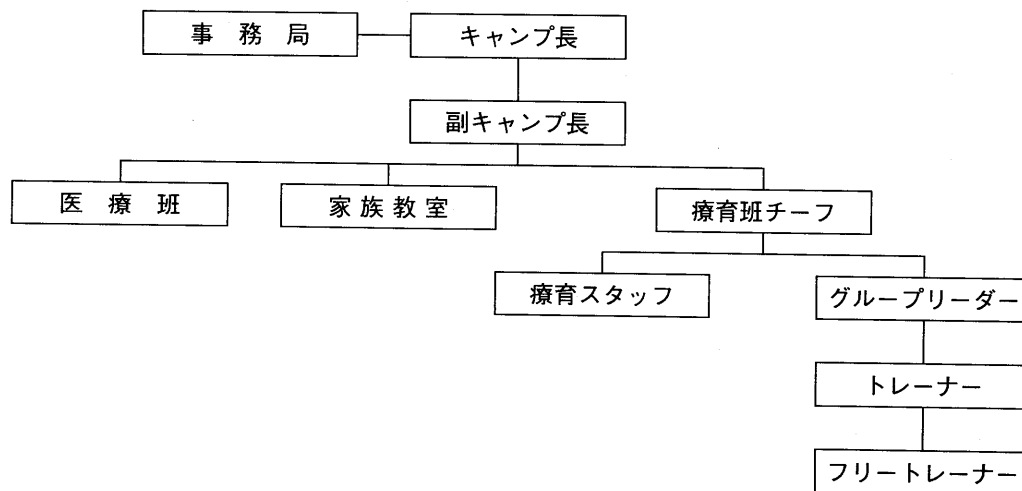


図1：現在のわかすぎ自閉症キャンプの組織図

## (2) ボランティアについて

ボランティアは、現実的な事情から宿泊人数が限られるために、さまざまな領域からバランスよく来ていただくこととした。その領域(表3参照)は、学校教諭、大学院生、医師等さまざまであるが、いずれの参加者も現在自閉症児・者に直接関わっているか、あるいはこれから臨床的に関わる意志のある方々にお願いした。

さらに、事前のオリエンテーションとしては、このキャンプの基本的な理念や基本となる対応の方法、さらに対象児・者の個々の特徴について説明を行った。

また、キャンプ中は、対象児・者の就寝後にグループでのミーティングが開かれ、そこでグループリーダーからの助言や副キャンプ長からの専門的な講義を受けることができるように配慮した。

表3：参加ボランティアの職種について

職 種	人数
養護学校教諭	12
学校教諭	4
大学院生	3
学 生	1
福祉関係者	3
医療関係者	1
医 師	1
兄弟児	1
合 計	26

## (3) 家族教室について

今年度の家族教室(今年度は父親の参加が2名)では、外部講師として中京大学社会学部の辻井正次助教授をお招きして、2日間にわたり、講義をして頂いた。それに合わせて、キャンプ長の木谷、副キャンプ長の中庭洋一(なかにわメンタルクリニック院長)、家族教室担当の中庭幸江(なかにわメンタルクリニック)が、参加家族の個別相談を担当した。その個別相談では、幼児期から青年期までの自閉症がもつさまざまな問題への具体的な対応とともに、必要に応じては、キャンプの後も、継続して相談が受けられるようにしており、実際に今回の参加者のうち、6名が新規に経過観察を受けている(なかにわメンタルクリニック、あるいは山口大学教育学部心理教育相談室)。

## (4) 自閉症児・者の参加について

自閉症児・者の参加は16名(詳細は表4参照)、兄弟児6名であった。そのうち、このキャンプの特徴としては、リピーターが表4に示したように、9名いることが特徴的である。また、年々参加する地域が広がり、現在は福岡県南部から山口県西部(下関市から3家族の参加)までの範囲で参加が見られる。

表4：第7回キャンプに参加した自閉症児・者のプロフィール

	年齢	性別	参加経験（回数）	兄弟児の参加	備考
1	21	男	6回	無	
2	18	男	5回	無	
3	17	男	7回	無	
4	17	男	4回	無	
5	15	男	6回	1名（妹）	
6	15	男	4回	1名（姉）	
7	11	男	無	無	県外
8	9	男	3回	無	
9	9	男	無	無	
10	7	男	無	1名（妹）	
11	7	男	2回	無	
12	7	男	3回	無	
13	6	男	無	無	県外
14	6	男	無	1名（姉）	県外
15	6	女	無	1名（姉）	
16	4	男	無	1名（妹）	

#### 4. 自閉症研究からキャンプのあり方について検討する

Tanguay, P.E. (2000) は、最近10年間の広汎性発達障害に関する文献レビューにおいて、自閉症研究の最近の動向として、遺伝子研究が増加したことを述べている。このことは、最近議論されてきた「心の理論」を代表とする対人認知論から推測される病因論の検討という方法論そのものの限界とも考えられる。またこの論文において、自閉症やアスペルガー症候群の発症率が高くなっていること（2000人に1人の発症率）も述べているが、この問題は、今後の学校教育（特に通常学級）や思春期・青年期、さらに成人の就労等の問題に速やかな対応が必要であることを示唆している。

この治療教育的側面な研究については、わが国の動向として、TEACCHプログラム (Schopler, E., 1997) を採用する場所が増えてきている。その理由としては、種々の要因が考えられるが、もっとも重要なものは、自閉症児・者の行動分析を従来の行動療法のように純粹客観的な視点でのみ判断し、治療者側の設定した行動パターンの形成を目的としたものとは異なり、TEACCHプログラムでは、自閉症児・者の「芽生え反応」を含めた、主体的な行動パターン（逆に苦手なパターン）を詳細に分析し、それぞれの個人の特徴に合わせたプログラムを作成するという柔軟性を持つ点だと理解できる。また、余暇活動をも重要なプログラムとして位置付けており、生活全体、あるいは生涯にわたる治療教育の必要性を主張する点も重要である。

ただし、このプログラムが全ての自閉症児・者に最適なわけではなく、また日本の現状を考えると、全ての行動を構造化することはかえって自閉症児・者の自発性を阻害することも懸念される。したがって、我々自身も、一人一人の自閉症児・者への十分な行動分析とともにどうすれば彼らがより自発的な参加が可能となるかについて、このキャンプを通

して検討している状況である。

こうした我々の考え方の基本は、最初に示したように朝日自閉症キャンプでの自閉症児との情緒的な交流を通して体得したものである。具体的には、キャンプでの活動は単純に自閉症児に何かをさせることが目的ではなく、逆に彼らが集団活動等に参加したい雰囲気を作り、その中に彼らが自然に入ってくるといった新たな情緒的体験（小林はこの方法を「阿波踊り方式」と呼んでいる）を生み出すことと、その体験を一对一の担当者が情緒的側面を共有することにより、対人関係への変化が起こるようにすることである。

こうした情緒的側面を重視する考え方は、一方では「心理療法的なアプローチ」として、否定的な考え方をされてきたが、最近になり、自閉症がもつ心の世界の解明とともに、その有効性も再認識され始めている（杉山、2000、辻井、1996、白石、2000）。こうした情緒的な側面の重要性は、単に理屈の上だけのものではなく、福岡市での自閉症児のためにボランティアグループ「土曜学級」の実践報告（井上、1980、森ら、1994、木谷、1996）や、土曜学級や朝日自閉症キャンプに参加した自閉症児・者の予後調査からも、その有効性は実証されている（Kobayashi, R. et al, 1992）。

さらに、今年度偶然に同時放映された自閉症者を主人公としたテレビ番組は、色々な意味での自閉症への啓蒙となった。言うまでもなく、こうした作品に大きなヒントとなったものは、ここ10年来の高機能自閉症児・者やアスペルガー症候群での研究や自叙伝が多大な影響を及ぼしていることは確かである（Grandin, T., 1986、Williams, D., 1992、森口、1996）。こうした傾向は、自閉症理解には重要なことではあるが、果たしてそれで自閉症についての理解が十分になされたとは思われない。

特に、教育現場においては、自閉症、LD、ADHDとの鑑別がつかない教師が多いことも現実であり、また、高機能自閉症やアスペルガー症候群になると、単にわがままな子どもとの理解で終わっている現状も見られる。こうした自閉症についての理解が十分でない現状は、結果として自閉症児・者をもつ家族への理解のなさにも通じる。今回のキャンプでの初参加の家族でも、長い間療育を受けながらも、自閉症と診断されず、今回のキャンプをきっかけに自閉症とわかって、その療育機関から自閉症の診断にこだわる家族が怒られるということがあった。最近のように、自閉症児への早期療育の必要性とその結果としての予後の良さを考えると、専門機関での対応についてももっと課題があるようだ。

以上のように自閉症研究の現状を整理すると、その結果として自閉症児・者及びその家族への対応のポイントは、上述のようなキャンプの理念に帰結することが十分に理解できるものと考えている。

## 5. 事例報告

ここでは、3人の自閉症児・者の実際の参加状況について報告する。

### (1) 事例：A男（21才、現在、施設入所中）

A男は、中学3年生まで参加できる別のキャンプへの参加ができなくなった後、このキャンプに参加するようになった。最初の参加から、集団行動よりも、自分のペースでの行動が目についたが、声かけをすれば、全体のプログラムには十分に参加できていた。また、夏祭りの中のカラオケ大会でも、アニメの主題歌も積極的に歌っていた。

しかしながら、現実の生活では、学校場面では頑張っているが、家庭では両親に対する強い反抗も見られていた。そのために、養護学校高等部卒業後、しばらくは作業所に通所

していたが、将来的なことも考え、施設入所となる。

今年度、母親より施設での不適応について、副キャンプ長のクリニックに連絡があった。クリニック側は職員を含めた対応を行ったが、キャンプでも不安定になるのではないかと、母親は心配だったようだ。しかし、キャンプの直前には、今度キャンプに行くからと、行動をコントロールすることができ、施設でも問題行動が減少していた。また、キャンプにおいても、それまでのキャンプとまったく変わらず、自主的にプログラムにも参加していた。時々、施設でも問題となっていた時間へのこだわりも見られていたが、周囲の許容的な雰囲気の中では、規制されることもなく、かえってひどいこだわりに発展することは見られなかった。母親自身は、家族教室において、キャンプ長にこれまでの誰にもわかってもらえなかった思いを話し、一緒に今後の対応について協議を行った。

(2) 事例：B太(15才、現在、私立高校情緒障害児学級1年生)

彼もリピーターの一人であり、今回が4回目の参加となる。さらに今回は、保護者に代わって姉が参加することもあり、姉にはボランティアとしてキャンプに参加してもらうこととした。B太自身は、キャンプに慣れていることもあり、また、情緒的にも安定しており、積極的にプログラムに参加していた。

現実生活においても、家庭や学校でもいつも安定した状態として生活できている。姉自身も初めての参加にも関わらず、キャンプ全体の雰囲気にもすぐになじみ、夏祭りでは姉弟で「スピード」のカラオケを上手に歌い、みんなの注目の的であった。B太にとっては、カラオケといった日常的ながらも自然な気分転換により精神的な健康さを保っている姿を我々に明確に教えてくれた。

(3) 事例：C輔(6才、現在、情緒障害児学級)

県外からの初参加。参加する前までは、母子分離の経験がなくC輔が母親から離れられるかの心配もあったが、それ以上の兄弟児として参加する姉(小3)が、みんなの中に入っていけるかどうかの心配の方が強かった。

実際には、C輔が途中のパーキングエリアで靴をなくしてしまったために、キャンプ地に来る早々、パニックを起こす。また、姉も緊張はしていたが、キャンプ長(顔見知り)が声をかけると安心して、みんなの輪の中にもスムーズに入っていった。心配した母子分離不安もなく、二人ともに初めての場所と人の中で、自由に過ごすことができた(既に来年も行くと言っている)。

母親自身は、福岡県外からの初めての参加であるが、就学について悩んでいたときに、B太自身が高機能自閉症との診断を筆者から受けて、その後も定期的な面接を行っていた。さらに、地域的な問題もあり、なかなか親たちも積極的に動くことがなく、自閉症に関する正確な情報も伝わりにくいために、自閉症についてさらに正確な情報を聴きたいという意向もあり、同じ地域の3家族で参加した。

家族教室では、辻井先生の話から地域に根付いた活動の必要性を痛感したようだ。実際に、地域に戻ると母親の考え方に賛同してくれる家族や療育者や医師を中心にして、定期的な活動をスタートされることができている。

以上の事例で理解できるように、このキャンプは、実際に行われる2泊3日だけを目的としているのではなく、キャンプをきっかけとして日常的に実施できることを参加者全員で考えることを重要視している。



## 6. 考察

昨年「アスペ・エルデの会」(杉山・辻井, 1999)を岐阜に見学した際に興味を持ったことは、アスペルガー症候群や学習障害児本人自身(高校生以上のサポーターズクラブ)が、全体での活動において、それぞれに関心のある役割を担っていたことであった。

今回我々のキャンプにおいても、キャンプ全体の記録係として、一人の高機能自閉症児(過去にキャンプへの参加経験をもっている)に参加してもらい、本人の好きな写真を担当してもらった。もちろん、もう一人スタッフをつけたが、全体の活動中には一人で撮影することとなる。その成果としての写真は、我々の視点とは違ったユニークな作品も含めて、なかなかの出来栄であった。また、本人自身も高価なカメラを初めて手にして、緊張しながらも満足することができたようだった。

以上の考え方で理解できるように、キャンプそのものは、従来から自閉症児・者のためのキャンプとしながらも、実は我々のイメージした楽しさに彼らを合わせようとしていた帰来はないだろうか。我々自身も経験があるが、キャンプでもっとも楽しい体験をしているのは、実は我々療育側であったり、ボランティアであったりすることが多い。だからといって、こうした姿勢が悪いわけではなく、我々自身が楽しめないキャンプは参加する自閉症児・者も楽しめないことを考えると、こうした姿勢は基本的には重要であろう。

しかしながら、これまで述べてきた視点から再考すると、自閉症児・者にとっては、従来のプログラムに参加することで味わう体験とは違った体験の方法(今回の記録係のように)が、彼らに自発性と他者との情緒的な関わりを作っていくことにつながる場合もあるのではないかと考えている。これには、自閉症児・者自身の能力の問題も配慮する必要があるが、高機能自閉症やアスペルガー症候群だけしかできないことなのだろうか。

考察というよりも、我々自身の今後のかなり大きな課題を述べる形となったが、我々が自閉症児・者から学んだことの最大のもの、「自閉症児・者は自分たちをわかってくれる人を求めている」ことであり、それだけ彼ら自身が表現したくともできないさまざまな願望(これらは必ずしも自閉的でないはずである)をもっていることにも通じるものである。それならば、こうした療育キャンプという場において、彼らのこうした願望が共有できる他者との情緒的関係性を基盤として充足できるようにすること、さらにこうした自閉症児・者の姿を家族とともに理解していくことが、本当の意味での我々に求められている課題のように思われる。

## 文献

American Psychiatry Association 1994 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fourth Edition. (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳 1996 DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)

Grandin, T., Scariano, M. 1986 Emergence : labelled autistic. Arena, Navato, California. (カニングハム久子訳 1994 「我、自閉症に生まれて」 学習研究社)

井上哲雄 1980 自閉症児のためのボランティア・グループ -土曜学級- 講座:心理療法 8巻「セルフ・ヘルプ・カウンセリング」 pp.23-44 福村出版

木谷秀勝他 1996 25年を経過した土曜学級(自閉症児のための治療教育機関)の現状について 児童青年精神医学とその近接領域 Vol.37, No.1,112-113.

小林隆児・村田豊久 1977 自閉症児療育キャンプの効果に関する一考察 児童青年精神

医学とその近接領域 Vol.18, No.4, 221-234.

Kobayashi, R., Murata, T. & Yoshinaga, K. 1992 A Follow-up of 201 Children with Autism in Kyushu and Yamaguchi Areas, Japan. Journal of Autism and Developmental Disorders. Vol.22, 395-411.

小林隆児 1999 自閉症の発達精神病理と治療 岩崎学術出版社

森陽二郎・吉松靖文・村田豊久 1994 自閉症児への集団遊戯療法における共感的関わりが持つ治療的意義の再検討 九州神経精神医学 Vol.40, 360-366.

森口奈緒美 1996 変光星 -ある自閉症者の少女期の回想- 飛鳥新社

Schopler, E. 1997 Implementation of TEACCH Philosophy.; Cohen, D.J. and Volkmar, F.R., Ed. Handbook of Autism and Pervasive Developmental Disorders (Second Eds.) 767-795. Johnson Wiley & Sons, Inc.

白石雅一 2000 第19回日本心理臨床学会抄録集 p.117 日本心理臨床学会

杉山登志郎 1999 発達障害児の豊かな心 日本評論社

杉山登志郎・辻井正次 1999 高機能広汎性発達障害 -アスペルガー症候群と高機能自閉症- ブレーン出版

Tanguay, P.E. 2000 Pervasive Developmental Disorders : A 10-Year Review. Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry. Vol.39, No.9, 1079-1095.

辻井正次 1996 自閉症児者の「こころ」を自閉症児者自身が探し求める場 イマーゴ Vol.7, No.11,109-121 青土社

Willams, D. 1992 NOBODY NOWHERE (河野万里子訳 1993 自閉症だったわたしへ 新潮社)

## 謝辞

今回の報告をまとめるにあたり、常にキャンプ全体の運営を見守ってくれている副キャンプ長中庭洋一医師（なかにわメンタルクリニック院長）、療育班チーフ日高徹先生（福岡市中央養護学校教諭）をはじめとする多くのスタッフに感謝申し上げます。また、キャンプの実施にあたり、多大なご支援を賜りますコカコーラ・ウェストジャパン及び清風荘の職員の方々に深く感謝申し上げます。

なお、このキャンプは福岡県自閉症研究会及び朝日新聞西部厚生文化事業団から助成を受けていることも合わせてご報告致します。